

子どもが歌いたくなる条件とは：歌詞と振り付けに着目して

著者	横井 志保
雑誌名	名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇
巻	57
号	1
ページ	25-30
発行年	2020-07-31
URL	http://doi.org/10.15012/00001262

〔論文〕

子どもが歌いたくなる条件とは

——歌詞と振り付けに着目して——

横井志保

名古屋学院大学スポーツ健康学部

要 旨

保育において歌うことは子どもにとってどんな意味を持っているのか。保育者が弾く伴奏に合わせて歌う時、子どもたちは意欲的に歌っているだろうか。

平成30年4月に施行された幼稚園教育要領には、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が新たに示された。教師が指導を行う際に考慮するものとして幼稚園修了時の具体的な姿10項目が示された。幼稚園教育要領解説によると、10項目目に挙げられている「豊かな感性と表現」については、領域「表現」のみで育まれるのではなく、幼稚園における活動全体を通して育まれることに留意する必要があるとされている。すなわち、身体全体をうまく使ったり、五感で感じ取ったり、様々なことに興味を持って考えたり、人と直接関わっていく中で、保育者や仲間との活動を通して自然と育まれるような保育が求められているということである。

以上のことを踏まえ、本研究では筆者が39名の幼児を対象に実践を行った「キラキラぼし」を歌う子どもの姿から、歌詞と振り付けに着目し、保育において子どもが歌いたくなる条件とは何であるのかを明らかにすることを目的とした。その結果、子どもが歌いたくなる条件として、活動事例より以下の3点が明らかになった。①楽しい雰囲気が感じられる人間関係が構築されていること ②簡単な振り付けがあること ③年長児には挑戦的な内容が含まれること の3つの条件が示唆された。

キーワード：歌う、幼児、歌詞、振り付け、保育

A study on activities in which children sing actively with their friends in kindergarten class

——Focus on lyrics and choreography——

Shiho YOKOI

Faculty of Health and Sports
Nagoya Gakuin University

発行日 2020年7月31日

1. 問題と目的

保育において歌うことは子どもにとってどんな意味を持っているのだろうか。子どもにとって歌はとても身近なものである。乳児期は親や保育者に歌って聞かせてもらい、少し大きくなって話せるようになると一緒に歌いだす。また、一人遊びしながら口ずさんだり、友だちと声を合わせて楽しむ姿も見られるようになる。そんな身近な存在の歌であるが、保育の活動として保育者やクラスの仲間と歌う歌はどのように歌われているだろうか。保育者が弾く伴奏に合わせて歌う時、子どもたちは意欲的に歌っているだろうか。

平成30年4月に施行された幼稚園教育要領には、幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が新たに示された。教師が指導を行う際に考慮するものとして幼稚園修了時の具体的な姿10項目が示された。幼稚園教育要領解説（2018）¹⁾によると、10項目目に挙げられている「豊かな感性と表現」については、領域「表現」のみで育まれるのではなく、幼稚園における活動全体を通して育まれることに留意する必要があるとされている。すなわち、身体全体をうまく使ったり、五感で感じ取ったり、様々なことに興味を持って考えたり、人と直接関わっていく中で、保育者や仲間との活動を通して自然と育まれるような保育が求められているということである。

歌う活動において梅澤（1998）²⁾は「子どもたちと構成する音楽的な場は、保育者自身の音楽的な場でもある。教師や保育者が、自身の音楽的な場を無理なく自然につくれることが、たとえ聴いているだけで、うたっていないくとも、子どもたちの歌う活動を成り立たせる条件ではないかと考える。」と述べ、保育者の役割の大きさを示唆している。筆者もこれまでに、音楽的な活動をする場合、保育者は音楽する仲間の一人として重要な役割となることを報告してきた³⁾⁴⁾。他に、遠藤(2000)⁵⁾による、音楽的発達を考える場合に声を出すことと動きを結びつけた表現行動と捉えていることから、身体表現の発達を歌いながら動く表現として分析した研究はあるが、歌うことと歌詞、振り付けに着目して子どもの歌う意欲について研究しているものは他にない。

以上のことを踏まえ、本研究では「キラキラぼし」を歌う子どもの姿から、歌詞と振り付けに着目し、子どもが歌いたくなる条件とは何であるのかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

筆者が継続的に実践を行った事例に基づき子どもが意欲的に活動に参加しようとする場面、および意欲的に歌う場面における歌詞と振り付けの関係について分析した。分析結果については、実践に子どもと共に参加してくれた2人の保育者からの意見を参考に恣意的な分析をできる限り回避した。

対象：愛知県内私立N幼稚園5歳児6名、4歳児9名、3歳児20名、満3歳児4名の合計39名

対象者らは筆者が行う活動に保護者の希望により参加していた。その内5名は前年に引き続き2度目の参加であった。2年連続参加の子どもの年齢と男女の内訳は5歳女児3名、4歳男児1名、女児1名であった。実践には子どもの他に保育者が2名共に加わった。

実施日：2019年5月13日～2月17日

夏休み、冬休みを除き、週に1度およそ50分程度23回実施した

〈 実践概要 〉

主な実践の内容は、簡単な振りを付けながら歌ったり、和音によるピアノ伴奏に合わせて歩いたり、駆け足したり、ジャンプ、スキップ等して身体を動かしたり、手拍子を打ったりした。

使用した主な歌は、振り付けが全曲示されている『天野式幼児リトミック第1集、第2集』⁶⁷⁾の中から季節や子どもの興味に合わせて選択し使用した。歌は、ア・カペラ、ピアノ伴奏付き、歌の入っているCD使用と、子どもの様子に合わせて使い分けて筆者も共に歌った。また、他に「Twinkle Twinkle Little Star (「きらきら星」英語)」と「작은 별 (「きらきら星」韓国語)」を実験的に歌った。

対象の集団は縦割りであったが、内容に合わせて異年齢一緒に全員で行ったり、学年毎、年長児と年中児、年少児と満三歳児の組み合わせで行うこともあった。

3. 結果と考察

(1) 人・歌・場との出会い

実践に参加している子どもたちは1年間を通して行われる筆者の行う活動への希望者のみであったので、場所は幼稚園の保育室で保育時間内であったが、普段の生活とは違い、活動の行われる時だけ各クラスから集まってきた。前年度も実施していたので、参加2年目の5名を除いて、ほとんどの子どもが実践者である筆者とは初めて会う関係であった。同時に、子どもたち同士もほぼ新しい関係であった。

5月、実践1回目～3回目は子どもたちがすぐに振り付けしながら歌える「かえるのうた」(ドイツ曲/天野蝶振り付け)⁸⁾を何度か歌った。

【事例1 5月下旬3歳児「カエル先生来た！」】

既に保育室に集まっていた子どもたち。3歳女児が廊下に到着した実践者を見つけると駆け寄り、大きな声で「カエル先生来た！カエル先生！カエル先生！……」と言うと、それを聞いた近くにいた他の3歳児も一緒に「カエル先生！カエル先生！」と囃し立てるようにリズムカルに笑顔で連呼した。

入園間もない3歳児にとって、ようやく幼稚園に慣れてきた頃に出会った実践者は、園の先生とは違う、週に1度やって来ては楽しいことを一緒にしてくれ、「かえるのうたを教えてくれる人」で、皆が「先生」と呼ぶから「先生」と自分も呼ぶという存在として認識されていたのであろう。4、5歳児はすぐに実践者の名前を覚えて呼んでいたが、親しみを込めて声を掛けたかった3歳児だが名前がわからず、何度か一緒に歌った「かえるのうた」のイメージから「カエル先生」と呼んだのだ。入園間もない3歳児にとって実践者や異年齢の子どもたちと一緒に「かえるのうた」を歌うこの場所は楽しい場となっていたことが「カエル先生」の連呼に繋がったと言えよう。

(2) 振り付けは楽しく歌う助けとなる

1学期も後半となり、子どもたちは筆者との活動にも慣れてきた。七夕も近かったことから「キラキラぼし」(外国曲/天野蝶振り付け)⁹⁾を振り付けを付けて歌って聞かせた。

【事例2 6月下旬 振り付けながら歌う】

実践者が振り付けを付けて歌うのを聞くと何人かの子どもたちが「知ってる～」「知ってる～」と口々に言った。実践者が「じゃあ、歌ってみて」と、言うとき見たばかりの振り付けを真似ながら歌い始めたので、実践者も振り付けを付けながら何度か一緒に歌った。実践者の歌った歌詞と子どもたちの知っていた歌詞には少し違いがあったので、子どもたちの歌う歌詞に合わせて歌った。

子どもたちの振付の手はキラキラと手首をローリングさせながら頭上高く力強く上がっていき、その動きにマッチした声も張りのある高らかな声であった。

子どもたちは「キラキラぼし」の歌を既に知っていたので、初めて見た振り付けもすぐに覚えて踊りながら歌うことができた。大人は歌に振り付けが付いていると考え、歌に振り付けを合わせようとするが、子どもたちにとって振り付けは歌そのものであり、一体として捉えていると言えよう。また、本事例の様に身体を動かしながら歌うことも、子どもにとって歌う楽しさとなっている。

(3) 子どもにとって歌詞の意味がわかるということ

大人が歌を歌う場合、まずは歌詞を理解し、その意味を知り、それに合わせた歌い方をするであろう。では、子どもはどうか。「キラキラぼし」を何度も楽しそうに振り付けながら歌うので、実践者が英語で歌って聞かせてみた。

【事例3 6月下旬 英語の歌詞を覚えて歌う】

実践者が「じゃあ、こんな歌はどうか？」と、英語の「きらきら星 Twinkle Twinkle Little Star」を歌って聞かせると「これ知ってる～」と、年長女兒。すぐに年中男児が「トゥインクル トゥインクル」と大きな声で歌いだすと、他児も真似て「トゥインクル トゥインクル」と、その部分だけ何度か歌った。

「これって何で歌ってるかわかる？」と、子どもたちに尋ねると「これは英語だよ」と、さっきの年中男児が答えた。

その後2週続けて英語の「きらきら星 Twinkle Twinkle Little Star」を歌うと子どもたちは覚えて歌うようになった。

英語であっても日本語であっても関係なく同じように歌う子どもたちに、次は韓国語の「きらきら星작은 별」を歌って聞かせた。

【事例4 6月下旬～7月 年長児は挑戦的に覚えることが楽しみとなる】

実践者が英語の時と同様に、韓国語の「きらきら星작은 별」の始めの1節を歌って聞かせると年長女児が興味を示し、大きな声で真似て歌い始めた。A子は特に覚えるのが早く、誰よりも大きな声で歌った。これにつられて周りの子どもたちも「パンッチャッ パンッチャッ……」と覚えて一緒に歌い始めた。

繰り返しの部分を除いて1節ずつ3週に分けて一緒に歌った。続きを早く教えてほしいとばかりに、毎週A子を中心とした年長女児が前の週に覚えた部分を得意気に歌ってみせた。

子どもたちが英語や韓国語の「きらきら星」を歌うことは、日本語で歌うことと特別区別されてはなかったが、特に年長児は日本語以外の言語で歌うことに面白さを見出していた。韓国語の響きは日本語に似ていることも歌いやすく覚えやすかったと言えようが、年長児は挑戦的な活動を好む。まさに本活動は年長児の好奇心を刺激し、意欲的に取り組むことに繋がった。子どもにとって歌詞は、意味ある言葉として理解されてはならず、‘音’として捉えていることがわかる。

総括と課題

歌は、他の打楽器等を使う音楽的な活動とは違い、自分の身体から直接音となる声を出す。そこにはその時の子どもの心が直接反映されよう。つまり、歌うという行為はその時の心の持ち方に左右されやすい。保育者は、クラスの皆で声を合わせて歌う時、明るく楽しく歌って欲しいと願ってピアノ伴奏するが、子どもが歌いたくなるような環境があるということを認識しているだろうか。

楽しさや面白さを共有できる仲間の存在があり、歌いながら身体全体を使って表現ができることは子どもにとって魅力的であり、歌いたくなることに繋がることが示唆された。

以上の結果から、子どもが歌いたくなる条件として、実践事例より以下の3点が明らかになった。

- ①楽しい雰囲気が感じられる人間関係が構築されていること
- ②簡単な振り付けがあること
- ③年長児には挑戦的な内容が含まれること

本研究では、楽曲の音楽的な分析はしていない。それについては今後の課題としたい。

謝辞

実践に協力して下さった園の先生方と楽しく参加してくれた子どもたちに感謝致します。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省 2018『幼稚園教育要領解説』
- 2) 梅澤由紀子 1998「幼児のうたう活動における「音楽的な場」の成り立ち」愛知教育大学教育実践総合センター紀要 創刊号 pp. 143-148
- 3) 梅澤由紀子・横井志保 2010「リズム表現としての両手で叩く活動の構造と援助について」愛知教育大学幼児教育研究(15) pp. 1-8
- 4) 横井志保 2010「幼児の叩く活動に関する研究—表現を引き出す活動の流れと方法—」名古屋柳城短期大学研究紀要(32) pp. 141-146
- 5) 遠藤晶 2000「幼児における音楽に合わせた身体表現の発達—歌いながら動く表現の獲得過程—」日本保育学会大会研究論文集(53) pp. 270-271
- 6) 永倉栄子編 1983『天野式幼児リトミック第1集』チャイルド本社
- 7) 永倉栄子編 1987『天野式幼児リトミック第2集』チャイルド本社
- 8) 前掲書6) p. 78
- 9) 前掲書6) p. 184